

FRASC 設立会議：アジアにおける狂犬病撲滅へ向けた獣医師会の連携

2025年3月23日、韓国・ソウルにてアジア獣医師会連合（FAVA）のアジア狂犬病清浄化特別委員会（FAVA Free Rabies Asia Special Committee：FRASC）設立会議が催されました。この委員会はホ・ジュヒョン FAVA 会長が2024年10月に開催された FAVA 大会の中で、設置を公約していたもので、2030年までに犬に由来する人の狂犬病感染事例をなくすことを目標とした Zero by 30 に向けてアジア各国の獣医師会が連携していく重要な一歩となりました。

FRASC 設立の背景

狂犬病は、特に東南アジア地域において依然として深刻な公衆衛生上の課題です。WHO の報告によると狂犬病による死者数は年間 59,000 人に上り、その多くがアジアとアフリカで発生しています。FRASC は FAVA 加盟獣医師会が連携して、犬媒介性狂犬病の撲滅を目指すプラットフォームとして設立されました。

東南アジアにおける狂犬病対策の現状と課題

FRASC は発起人である韓国獣医師会からチョン・インソン先生が委員長を務め、副委員長 2 名、委員 14 名でスタートしています。韓国、台湾、マレーシア、スリランカ、インド、オーストラリア、インドネシア、シンガポール、ミャンマー、ベトナム、フィリピン、タイの獣医師会から委員が参加しています。

今回の会議では委員の任命式、狂犬病に関する学術講習に続き、各国の委員から自国における狂犬病の発生状況と対策について共有されました。何が狂犬病の根絶を難しくしているのか、そこには地理的、社会的な要因が絡み合っています。各国代表者の発表から要点をご紹介します。

フィリピン

年間死亡者数が 200～300 人と東南アジアでは最も狂犬病の被害が大きい国の一つです。狂犬病対策は地方自治体が行っていることから、予算の乏しい地域では対策が後回しにされてしまい、ワクチンが購入できない、冷蔵設備が用意できず備蓄ができないといった状況が起こります。国内には推定 1,200 万頭の犬・猫が徘徊しています。これはフィリピンでは犬猫を放し飼いにする人が多いからです。狂犬病発生後の調査で感染原因とされた犬の多くに飼い主がいたことが分かっています。2021 年には犬による咬傷が原因で感染した狂犬病の 82% が放し飼いにされた飼育犬によるものでしたが、飼い主への啓発活動が実り 2022～2024 年は飼育犬が原因であったケースは 22～30% まで低下しました。しかし狂犬病による死者数は近年増加傾向にあり、野良犬への Catch, Neuter, Vaccinate and Return (CNVR)（捕獲 - 不妊手術 - ワクチン - 解放）推進が必要です。

台湾

台湾は 1961 年以来、50 年に亘り狂犬病清浄地域とされていましたが 2013 年にイタチアナグマで狂犬病の発生が起き、現在まで野生動物のウイルス保有状況のモニタリング調査が続けられています。サンプル調査ではイタチアナグマの狂犬病ウイルス陽性率は下がってきてはいるものの、直近 5 年間は 13～24% とまだまだ無視できない値を示しています。モニタリング調査で判明した高リスク地区においては野生動物に対しても Trap, Vaccinate and Return (TVR)（捕獲 - ワクチン - 解放）対策が行われています。

タイ

東南アジアでは最も狂犬病対策が奏功している国の一つで、死者数は年間数名まで低下しています。動物のモニタリング調査では2024年に305件の抗狂犬病ウイルス抗体の陽性個体が見つかり、内訳は犬262頭、牛34頭、猫9頭でした。タイでワンヘルスアプローチによる狂犬病対策が進んだ背景には、チュラポーン王女が狂犬病対策に熱心に取り組まれたことが大きな要因です。全国に7,773ある行政区から回収されたサンプルは、国内9カ所の試験所で検査を実施しています。ひとたび狂犬病が発生するとリングワクチネーションを実施します。獣医師が多く勤務する畜産開発局（Department of Livestock Development：DLD）では年間20万頭を目標に犬猫の不妊手術を実施しています。2025年には97%の行政区で狂犬病清浄状態を達成できる見込みです。

スリランカ

人口約2,200万人のスリランカは観光業が盛んで、狂犬病の抑制は国民だけでなく旅行者の安全を守るためにも重要です。国内の犬の頭数は

300万頭、うち120万頭が野良犬であると推計されています。毎年120万回頭分の予防接種が犬に対して行われていますが十分とはいえず、人の死者数減少はワクチンの暴露後接種（post-exposure prophylaxis：PEP）に頼っている状況です。マイクロチップによる犬の全頭登録が今後の課題です。犬への大規模ワクチン接種を行うことで、現在年間330万USドルかかっているPEPコストを削減することが目標になっています。

世間一般では、アジア地域では未だに狂犬病が蔓延しているという漠然としたイメージをお持ちの方が多いと思いますが、各国の獣医師と獣医師会が狂犬病の撲滅に向けて精力的に活動し成果を上げています。今回の会議ではホ会長からの「狂犬病の撲滅は始まりにすぎない、狂犬病を撲滅したら次の重要感染症の対策に取り組もう」という前向きで力強い言葉が印象的でした。本稿でご紹介したFRASCでは今後、ワクチンが不足している国へのワクチン供給、CNVRの人的支援を中心に活動を展開していく予定です。委員の参加は随時可能ですので、本稿をご覧ください。ご関心をお持ちいただけましたら、ぜひ日本獣医師会までお知らせください。



◀ FRASC 立ち上げ会議
に集まった各国代表



FRASC 事務局の開所式 ▶